



愛郷無限

# 土屋館 どやだて通信

発行者：大曲・花火通り商店街  
文責：辻

お問い合わせ：080-1265-7035  
tuck-t@akita-tsujiya.jp

2014年08月16日号 NO.490

写真提供：大崎市

## Subject：忘れないこと、語り続けること。

昨日は69回目の敗戦記念日でした。俳優であり歌手の福山雅治さんは、長崎から東京へ上京したとき、8月9日の長崎へ原爆が投下された日に東京では誰も黙祷しないことに大きな衝撃を受けたそうです。地元では歴史に深く深く刻まれ、代々語り継がれている甚大な受難に対して、日本人は正面から向き合っているのだろうかとか本当に疑問に思ったそうです。羽仁五郎さんの息子で、ドキュメンタリー映画監督の羽仁進さんは、人間は歴史の年号をこれまでの西暦、則ち紀元前・後（キリストの生まれた年より前・後）ではなく、ナチスのアウシュビッツの虐殺より前・後で数えるように変えるべきだと言いました。アウシュビッツという近代にない大量虐殺という犯罪を、全人類の世界共通の戒めとして、紀元を変えるほど深く歴史に刻むべきであろうと。東日本震災と福島原発事故が起きた2011年を、日本の歴史の一つの分水嶺として深く深く刻むべきであろうと誰かが発言したのを聞いたことがあります。

日本人は風に流されやすい、あたりを覆う「空気」に感染しやすい民族です。特に都合の悪いことは忘れ去るという能力に非常に長けています。そのおかげで戦後の驚異的な繁栄を築くことができたということも事実ですが、しかし一方で、歴史に深く刻み、世代を超越して絶対に忘れてはならないことさえも、忘れやすいのではないのでしょうか。

韓国では【恨（ハン）】という言葉があります。古い古い先祖から、知らず知らずに心の奥底に代々受け継がれる「悲しさ」や「怒り」や「やるせなさ」を意味する言葉だそうです。子ども達が思春期になり、不意に心寂しくなったり、或いは理由もない怒りがこみ上げてきたりすると、お母さん達は「それは誰の心の奥にも「恨」があるからだよ」と教えたそうです。そんな時はため息をついて、恨が晴れるのをじっと穏やかに待てば良いのだと教えるそうです。恨の息と書いてハムスン、恨が晴れると書いてハンプリ（日本語のあっぱれ（天晴れ）と語感が一緒ですね）。

世界中のほとんどの国でこれに類似する意味の言葉があるそうですが、一方、現代の日本には残念ながら見当たらないそうで、日本的だな～と思う一方、とても残念でなりません（太平洋以前は「愁」という言葉が頻繁に使われていたそうですが、戦争以来、女々しい言葉として使われなくなったそうです）。

私たち戦後世代、戦争を知らない若い世代、しかも地方の凡夫ができること。それは決して声高に「愛国心を叫ぶ」、「国防の危機をまくし立てる」ことではないのだと思います。私たちごとき末端の凡夫にとっては、まずは家族と話し合うこと、そして一緒に学ぶことではないのでしょうか。戦争体験を持っている祖父母が健在ならそのお話を一緒に聞く機会をつくる。それが無理なら、テレビなどで報じられる番組やドキュメンタリーを子ども達と毎年必ず一緒に見て、話し合ってみることはないのでしょうか。一番確実で深い深い伝承は、血肉を分けた血族と、そして絆深い地域の中でのみ得られる。もはやメディアや自治体は頼ることができないと思わねばなりません。